

# たじびのたより



～科学から推理する～

## 立部遺跡に眠る平安時代 火葬墓の被葬者像



### 立部遺跡とは

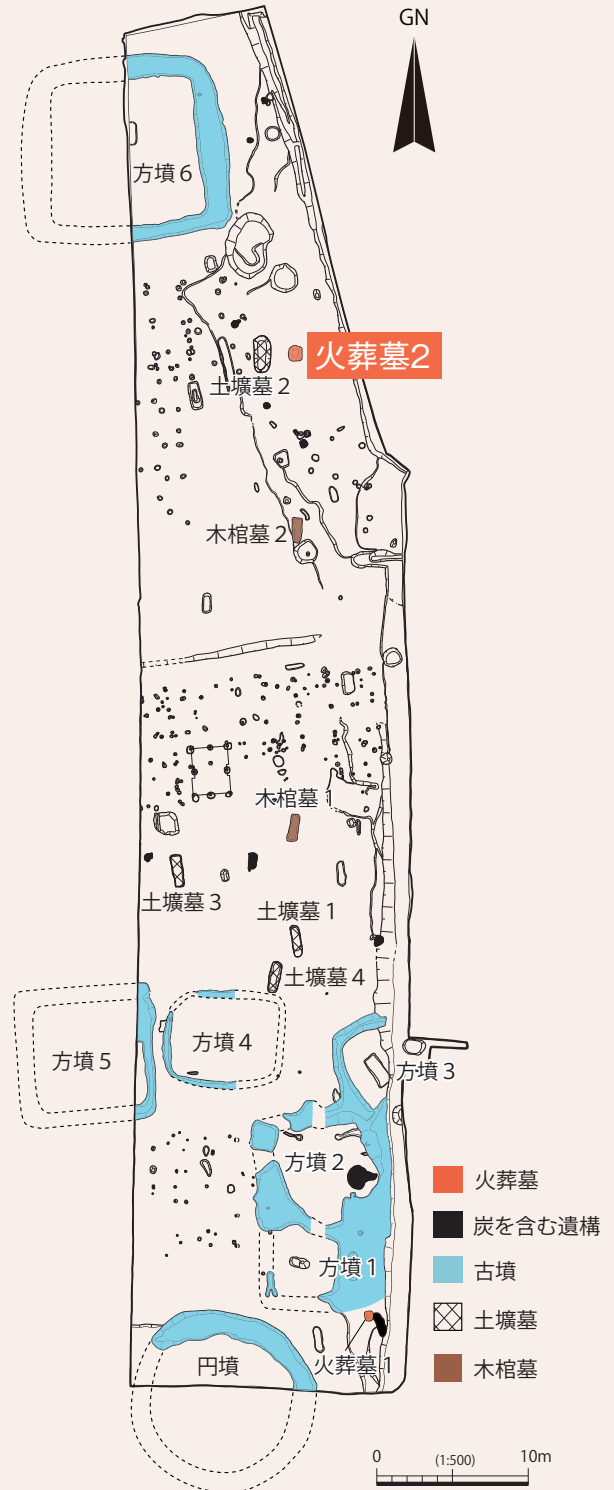
立部遺跡は縄文時代から近世の集落跡などで、1990年に行った大塚青少年運動広場拡幅工事に伴う発掘調査では、古墳時代から鎌倉時代の遺構・遺物がみつかっています。最も古い遺構は古墳時代中期後半～後期頃の円墳・方墳ですが、墳丘はすでに削られており、古墳を巡る溝（周溝）のみが残っていました。遺跡の北側に所在する全国で第5位の規模を誇る河内大塚山古墳との関係はよくわかりません。

飛鳥時代になると穴を掘って直接遺体を納める墓（土壙墓）、奈良時代には須恵器横瓶（横に長い樽形の壺）を蔵骨器（骨壺）にした火葬墓、平安時代には本号で紹介する火葬墓、木製の棺桶を納めた木棺墓など様々な葬儀が行われ、古墳時代以来連綿と墓地として使用されていました。このことから、調査地は古墳時代以来のこの地域の氏族の墓地であった可能性が高いといえます。

鎌倉時代になると、かつての墓の記憶は失われ、集落として利用されるようになります。



調査地位置図



遺構平面図



## 出土した蔵骨器

ここで紹介するのは火葬墓2と名付けた平安時代の墓です。火葬墓2は調査地の北側に位置する直径1m、深さ20cm程度の穴に蔵骨器を置き、その周りには大量の木炭を詰めました。こうした墓穴に木炭を詰めたものを木炭郭といい、奈良時代以降の火葬墓によくみられます。

蔵骨器は器高23.6cmを測る須恵器の壺に、輪状のつまみを持つ須恵器の蓋を被せていました。壺と蓋同士は粘土でしっかりと固定して密閉されていました。この密閉方法は、近隣には類例がない非常に珍しいものです。

なお、蔵骨器と共に出土した土師器杯は9世紀前半（平安時代前半）の年代が考えられています。



蔵骨器蓋



蔵骨器壺



木炭郭



壺と蓋を固定する粘土

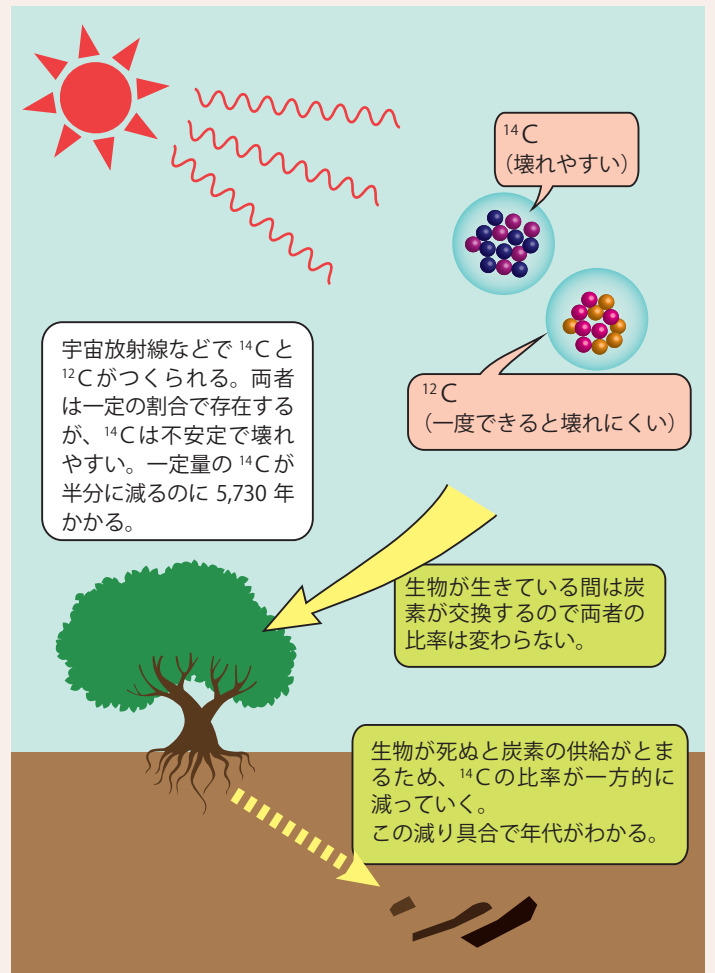
## 年代を調べる

遺跡から出土する土器は年号が書かれていないかぎり、直接その年代を知ることができません。そこで、炭素年代測定法という方法で年代測定を行いました。

これは試料の中の二種類の炭素（ $^{14}\text{C}$ と $^{12}\text{C}$ ）の比率を調べることで年代がわかるというものです。空気中には、大気圏上層で宇宙線の影響で作られた $^{14}\text{C}$ （中性子が8個、陽子が6個の原子核を持つ）と $^{12}\text{C}$ （中性子が6個、陽子が6個の原子核を持つ）の二種類が存在します。

このうち $^{14}\text{C}$ は構造が不安定なため、どんどん崩壊していきますが、 $^{12}\text{C}$ は原子核が安定しているので崩壊しません。生物が活着している間は呼吸や食事で $^{14}\text{C}$ と $^{12}\text{C}$ を等しく取り込むため、両者の比率は変わりませんが、生物が死亡すると炭素の取り込みが停止し、 $^{14}\text{C}$ だけが一方的に減っていきます。炭素を含む動植物遺体の中の $^{14}\text{C}$ の減り具合を調べることで死亡してからどのくらい時間が経っているかを知ることができます。

この方法で、蔵骨器内に納められていた火葬骨の年代を調べたところ766～940年（奈良時代中頃～平安時代前半頃）の年代が導き出せました。やや幅の広い年代ですが、蔵骨器と共に出土した土師器杯の年代と矛盾しません。



炭素年代測定法のしくみ



## どんな人が埋葬されていた？

蔵骨器の中には、上部までびっしり人骨が詰まっています。これをX線CT撮影でみると、様々な部分の骨が不規則に詰め込まれていることがわかります。このころにはまだノド仏を最後に安置するなどの方法は普及していませんでした。

さて、この人骨を取り出して破片をつないでみると、手足の骨や頭蓋骨の一部が復元できました。手足の骨の長さは身長に比例し、その太さは体格と比例します。

この被葬者は身長158～160cmで、特に上半身の筋肉が発達した男性だったようです。また頭蓋骨の癒合具合や歯の摩滅状態からおおよその年齢を知ることができますが、これにより熟年（40～59歳）で亡くなったこともわかりました。

また、骨を接合してみると、大腿骨などが著しく変形していることがわかりました。これは筋肉や腱がついた状態で火葬をしたため、高熱で筋が引っ張られ、骨が変形したものと考えられます。このことから死亡後まもなく火葬されたと考えられます。



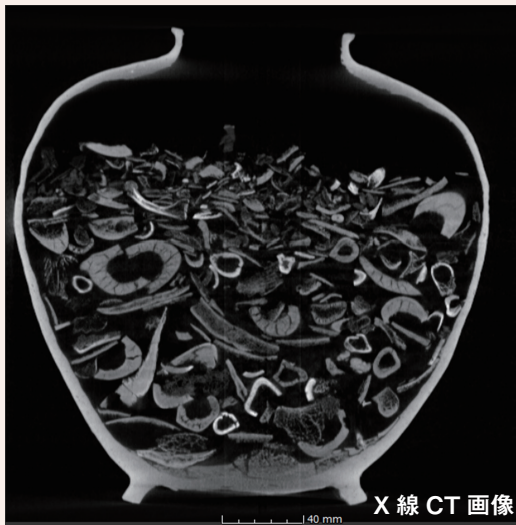
X線CT撮影



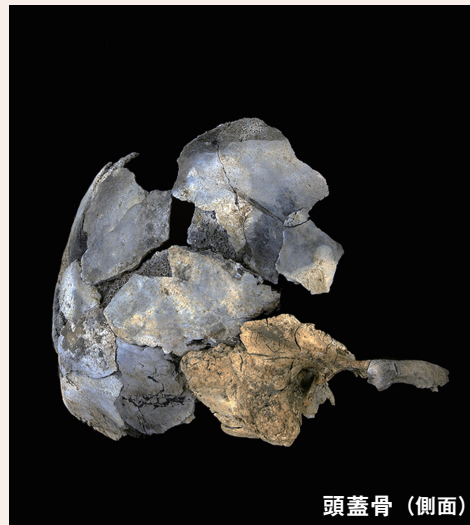
指の骨



※左は現代の見本  
しょうわんこつ  
上腕骨



X線CT画像



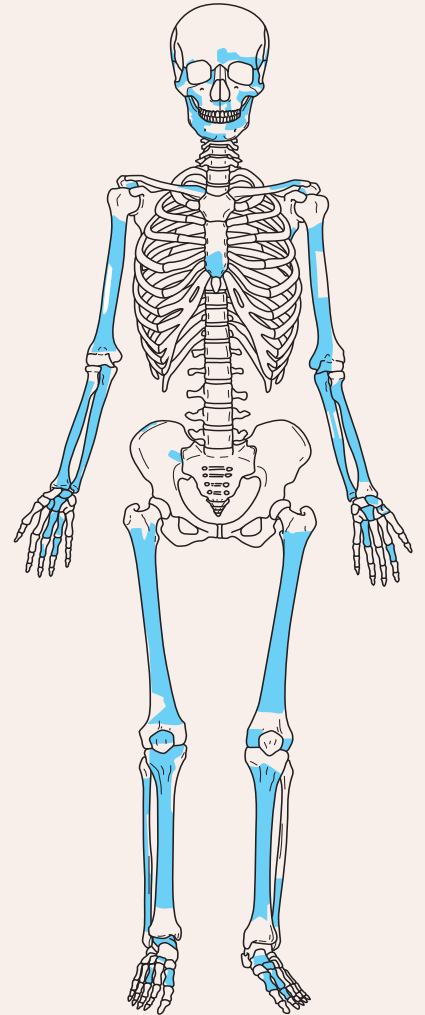
※右は現代の見本  
頭蓋骨（側面）



あご  
顎の骨



※右は現代の見本  
ひざ  
大腿骨（膝の骨）



納められていた骨（水色部分）

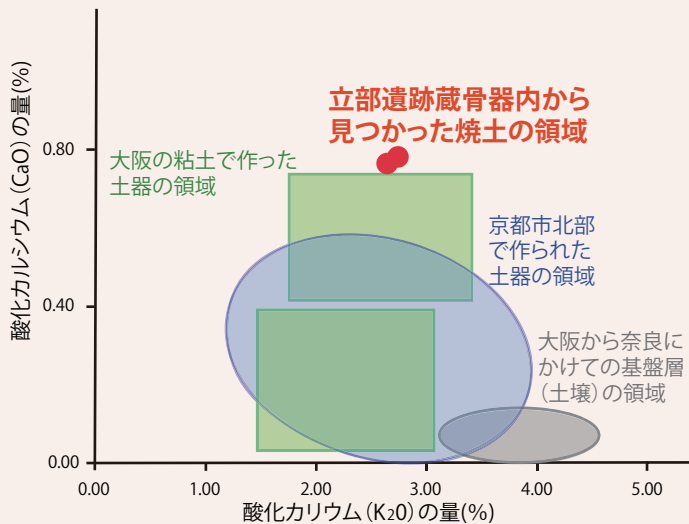
## どこで亡くなった？

この蔵骨器には不思議な点があります。壺の口縁端部が小さく外側に飛び出し、全体的に緩やかな卵形をしているほか、蓋のつまみが通常の宝珠形ではなく輪状になっています。これは大阪府下で通常見かける須恵器壺・蓋とはかなり形が異なります。全国各地の土器を調べましたが、同じ形のものはありませんでした。

そこで、蔵骨器の中から見つかった焼土を蛍光X線分析法という方法で調べました。蛍光X線分析法とは、X線を物質にあてると、その物質に含まれている元素の種類と比率が分かる方法です。土に含まれる元素はその場所によって様々なので、分析によってこの焼土が大阪の土と同じ元素組成かどうかを調べることができます。

分析の結果、この焼土は大阪のものとは異なるだけでなく、近畿地方のどの地域のものとも異なっていました。つまり、どこか遠くで亡くなり、火葬されて運ばれてきた人のようです。

立部遺跡が古墳時代から続く墓地であることを考えると、おそらく松原市立部の周辺を故郷とする人物で、遠方へ出かけて現地で亡くなり、火葬されてから故郷に帰ってきたのでしょう。



蔵骨器内から見つかった焼土と関連試料の成分分布

## 被葬者は誰？

それでは、故郷に眠るこの人物は誰でしょうか。

古代の法律である律令には、「兵士が行軍中に亡くなった場合は現地で火葬して埋葬しなさい」とあり、一般民衆や兵士などは任地で亡くなった場合、現地で葬られる決まりになっていました。

例外的に故郷へ帰ることができたのは貴族だけだったようです。天平10年(738)に周防国(山口県)の役所でつけられた※出納帳(『周防国正税帳』正倉院文書)には、大宰府に赴任していた万葉歌人、小野老が亡くなった際に、遺骨を故郷に送る「骨送使」という役を担わされた白氏子虫という人が周防国を通過した記録があります。小野老は亡くなった際には従四位下という位をもつ貴族であつたため、遺骨が故郷へ帰ることが許されたのでしょう。

さて、そうすると遠方で亡くなり、故郷へ帰ることが許された立部遺跡火葬墓2の被葬者もまた、貴族の一員であつたと考えられます。彼は中央政界で活躍し、地方赴任のすえ任地で亡くなり、遺骨になって故郷へ帰ってきたのでしょう。

残念ながら、この貴族の具体的な名前はわかりません。これからの課題ではありますが、いずれにしてもこの蔵骨器は、郷土の歴史の大切な語り部といえるでしょう。

※周防国の税収入・支出を記した帳簿。



蔵骨器出土状況

■ ホームページ <https://www.city.matsubara.lg.jp/> (ホームページ「文化・スポーツ」→文化財)

■ 埋蔵文化財に関する手続き / 文化財に関するお問い合わせ / 図書の販売など

松原市教育委員会事務局 教育総務部 文化財課 〒580-8501 大阪府松原市阿保1丁目1-1(松原市役所5F)  
電話: 072-334-1550(市役所代表) FAX: 072-332-7720(教育委員会事務局共通)

たじひのだより 松原市文化財情報誌 No.19 2020年3月発行 【発行】松原市教育委員会

【編集】公益財団法人元興寺文化財研究所・松原市教育委員会事務局 教育総務部 文化財課 【印刷】株式会社近畿印刷センター